



著者ル
序生先即太小四

接神術

(神美名一)

譯醉仙木齋

京東

版藏堂倫有高日

223
813

013703-000-3

特61-881

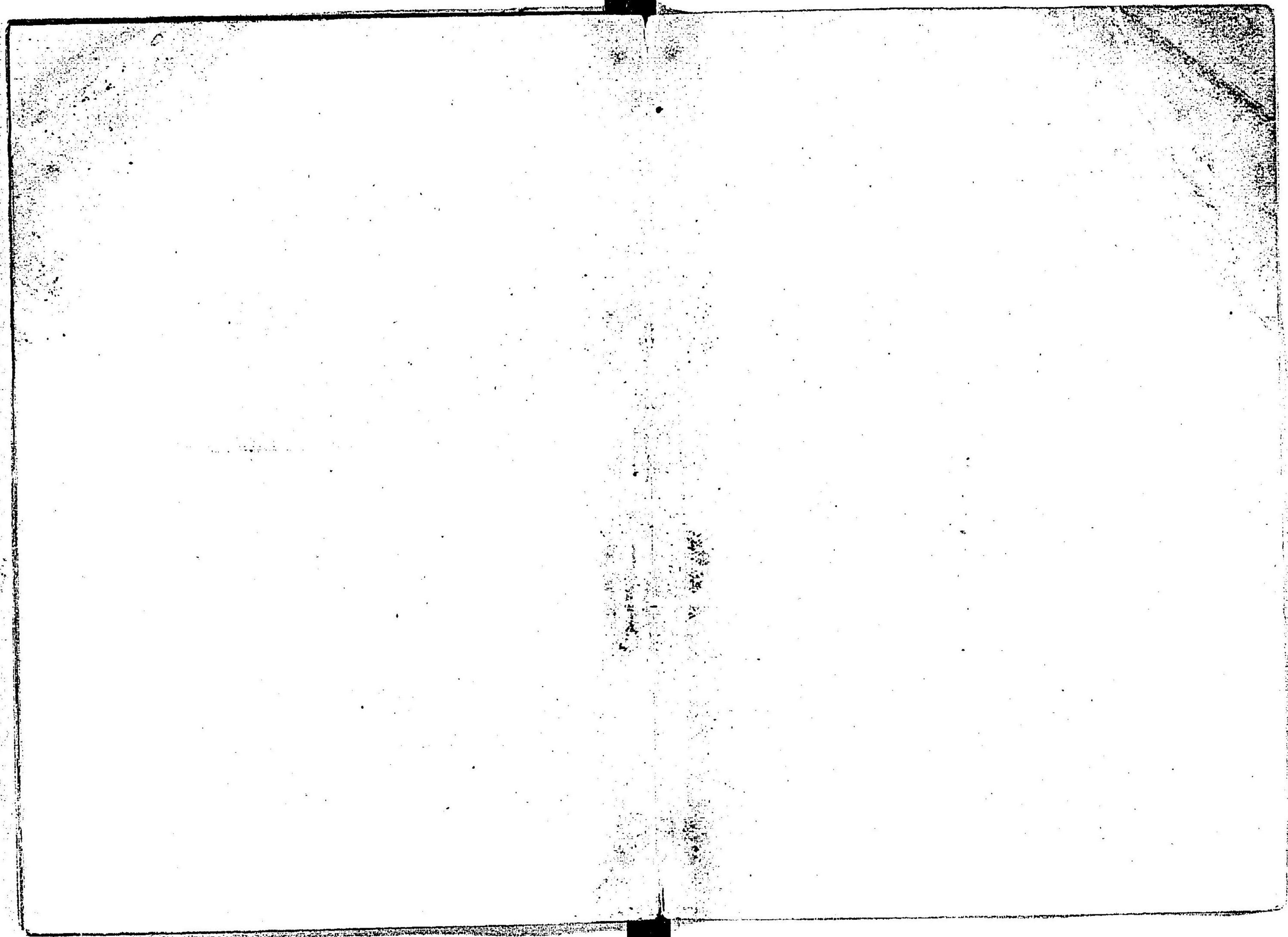
接神術 一名，美神

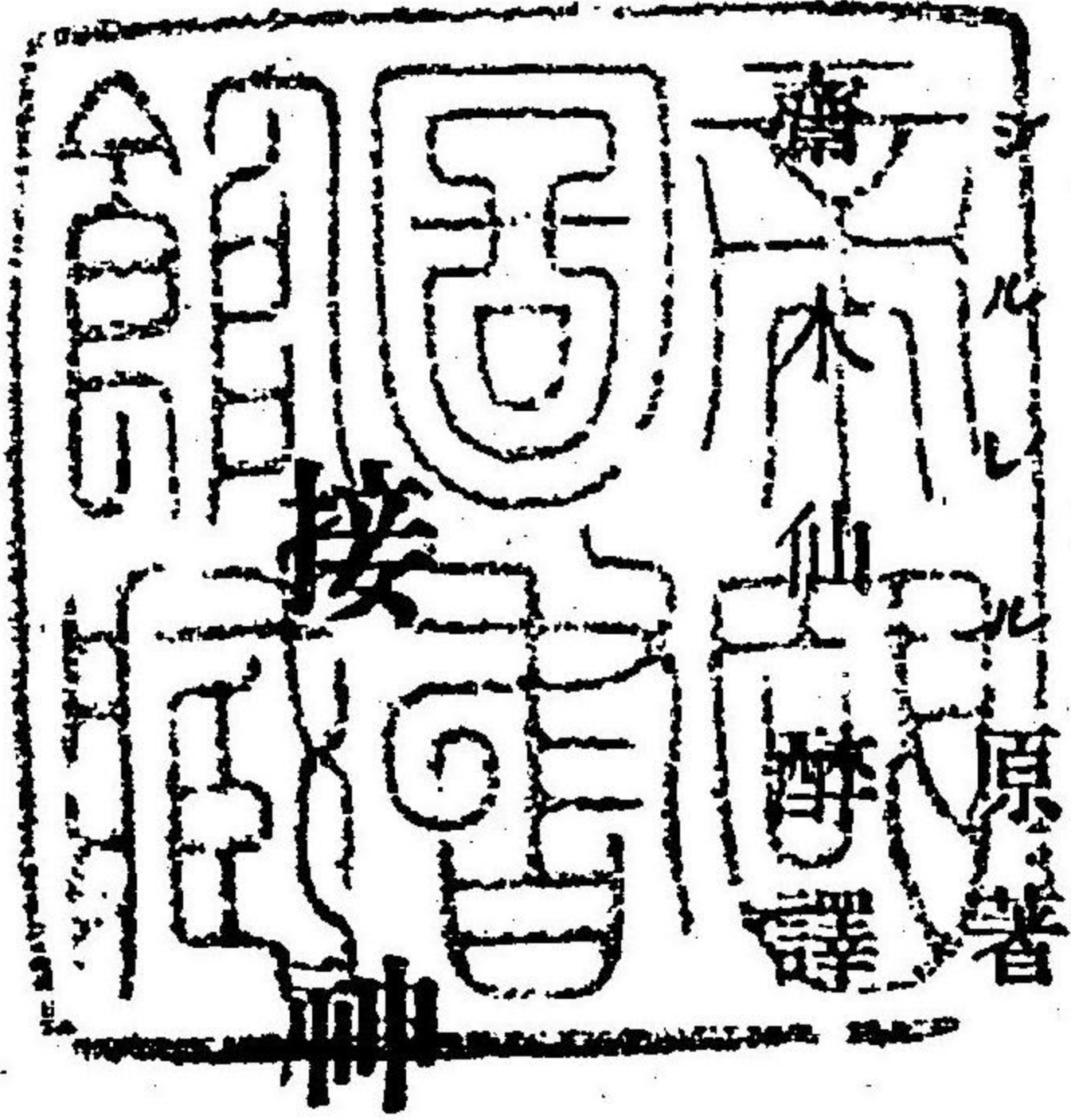
シルレル/著

M38

ABA-0175







術
二名美神



序

柳は緑にして花は紅なり。此の色相を實相と思ひ做して又終に怪まざるもの多し。榮枯盛衰は世の常態なり。此の有爲轉變を實相と觀じて終に此の外に出づるもの尠なし。世間に心猿意馬を驅つて此の假相の陰影を追ふもの多く、彼の色相に眼を失ひて煩惱の苦境に陥らざるもの尠なし。唯物射利の風潮茲に於てか老若男女を席捲して終に澆季濁世の歎聲を聞く。此の時吉備の産に一奇骨あり、紅顔にして美髯、一見人をして竹林の清客を懷はしむ。夙に佛教三寶の功德を悟れども終

に其の奴とならず、儒門を叩きて螢雪の苦を忍びしが、終に孔孟の糟粕に飽くと能はず、基督教兩典の眞理に造詣する所深しと聞けども、終に又之れに酔はず。よく三教の上に超絶し得て茲に世界眞宗設定の發願を爲し、新福音を傳ふるの大願を立てたりといふ。自から仙醉道人と稱し、頻りに法を説くに世間と出世間とを嫌はず、又た男女老幼貴賤の別を立てず、眞に當代の一奇物なり。予道人と詞章の交わりよく、其の平素の言行を識り、脱俗超凡の風あるを喜ぶ。頃日新著接神術を送りて、予に其の序文を求む。書名既に奇なり、内容また珍なら

ざらんや、收むる所すべて四篇接神術、神明篇、聖靈神母論、母心百人一首是れなり、皆な尋常一様の文字に非ず。接神術は原名を「テオゾフィー」といふ詩聖「シルレル」の神學隨筆の一なり、其の論「ウォルフ」メンデルスソンの圓滿説を經とし、「フアーゲツセン」の幸福論を緯とす、全篇「シャフツバリー」の「モテリスツ」を解説したるの趣あり、論旨固より輓近哲學の進歩にそはずと雖も、道人が之を世に紹介するの主旨は確かに貫徹せり、神明篇は短文なれども、道人が熱血を濺ぎたる快文字多し、讀者は先づ此の祖師的告白に驚歎して、然る後接神術を遡

讀するを可とす、聖靈神母論は三一哲學の梗概を説き
母心百人一首は「小ツアラッストラ」の如し道人と感興
を同ふするもの之を朗詠せば幾多真理の玉を拾ふべ
けん、予は此種の形以上の著述の多く世に出でんこと
を希望したるものなり、今著者の勞を謝し書肆の厚意
を多とす。

茲に一新伽陀を記して以て序に代ふ

圓滿真如の願求は人間心靈の本能なり

大慈大悲てふ舟によりてこそ此の大願は成就

すべけれ

大慈大悲は母の最大なるもの天地萬物これに
よりて生成す

而して忍辱献身は大慈悲の人的變象と悟るべ
し

母に生^いで母の成^なさるものやある母てふ徳の偉^たなる
かな

明治乙巳十月五日

牛込江戸川河畔僑居に於て

山 口 花 南

自序

謹んで本書を大和武士の典型にして人道の大恩人たる東郷大將閣下の母堂に捧ぐ
本書一篇これ畢竟母徳讚美の花の環也、あゝ當年此の花の環を捧ぐべきの人は東郷大將の母堂を他にして復た誰かあらんや、何となれば英雄は常に賢母を待つて而して後出づるものなれば也。

著者三歳にして母を失ひ、慈愛なる祖母の手に養育せられて成人し、幸に母徳の如何に尊く有難きものなる

かを味ふことを得たり、會々基督教の三位一體論研究の際聖靈の神母たることを自覺し、無限の感慨に撃たれ、熱心之を主張すること既に數星霜シルレルが接神術を讀むに至りて、之の高潔なる詩聖又幸に余と肝膽相照すものあるを見て、不肖を顧みず之を翻譯し世に公にするに至れる也。

大聖伏羲の圖にして邵氏に由りて傳はれる六十四卦方位の圖は凡てに勝りて余が尊信する所のものにして、余が信仰の立場なれば茲に之れを説くの要あり、此圖天圓地方を主張す、圖に布く者は乾は午中を盡し、坤

は子中を盡し、離は卯中を盡し、坎は酉中を盡し、陽は子中に生じ、陰は午中に生じ、子中に極る、其陽北に在り、其陰南に在り、此の二者陰陽對待の數、外に圓なる者を陽と爲し、中に方なる者を陰と爲す、圓なる者は動て而して天と爲り、方なる者は靜にして而して地と爲る者なりと、地動説の議論を以て易を天動説と笑ふことを止めよ、易の天とは即ち立躰の謂にして、地とは即ち平面の謂なれば也、此の圖特に三角形を掲げずと雖も、方の對角線の交たり、即ち方を形成せる直角三角形の弦の中心たり又圓の中心たる所のものは一切三角形の宗

たり、之れ即ち心其者也、要するに余が尊信する易學は宇宙的なる運動學にして、中心は力學、圓は動學、方は靜學たり、又之を幾何學を以て論ずれば方は平面幾何學、圓は立躰幾何學、三角は解析幾何學に屬す、嗚呼正々堂々たる大々的思想ならずや、易は宗教、哲學、科學一切思想のオーソリテイなる哉。

且つ此圖は歎美すべき曆にてある也、而かも太陰曆にあらずして太陽曆也、一陽來復の十一月より左旋向上して子丑寅を経て卯辰巳に至り、即ち少陽の春より太陽の夏に至り、再び右旋向下して午未申を経て酉戌亥

に至る、即ち少陰の秋より太陰の冬に達する也、而して子とは華、丑とは紐、寅とは演、卯とは所、辰とは震、巳とは巳、午とは忤、未とは木、申とは申、酉とは酒、戌とは戌、亥とは核の略字にて氣候變遷の目たる也、而して六十四卦は又六十四の候の意味を人に教ふる自然教育の寶典たり、嗚呼易は實に人生に大膽小心圓智方行を教ふる東洋復活の大生命にして大々的の自然教にてある也。

目次

接神術 (一名美神)

一	宇宙觀	一頁
二	觀念觀	六頁
三	愛觀	一五頁
四	犧牲觀	二五頁
五	神觀	三〇頁
六	總觀	三五頁

目次

神明

- 一 緒言.....四二頁
- 二 聖靈神母論.....四三頁
- 三 舊約書中の證據.....四六頁
- 四 新約書中の證據.....四八頁
- 五 世界的偉人の證言.....六〇頁
- 六 西洋大家母心百人一首.....六九頁

特61
881

接神術

宇宙觀

宇宙は神の思想也神は宇宙てふ女性を觀念し給ひぬ斯

くて之の理想的觀念像が實際に活現し生じたる宇宙が彼
女の創造主の空間を充たせし後——我に宇宙を斯く人間的
に表象することを許せよ——一切の思考者たる人間の使命

シルレル原著

齋木仙醉譯

宇宙觀

は之の現存せる全躰の最初の表號を再び發見し、又大器械の規則、複成的なる諸物の統一、現象を一貫せる規率等を鑿索し、斯くの如くにして此の大建築物を其基礎に遡りて運搬することになりて存す、斯るが故に泡沫夢幻なる現象界に在りて我が興味ありとする唯一の事實は、思考者換言すれば人てふ事實也、我等が宇宙と呼ぶなる大々の複成物は、彼女が存在することに由りて、我に其本躰の諸種の表出を表號的に示すが故に、我に對つて大に興味ある也。

抑も我が中に在る又我が外に在る一切は我に類似せる或一方の描出したる畫文字の如きのみ、自然界の規率なる

ものは思考者に自己を解せしめんが爲に供せる數字也——
一切の精靈が之に由りて以て最も圓滿なる精靈及び相互に談話する字母也、調和、眞理、秩序、美、卓越は我に快樂を與ふ何となれば彼等は能く彼等の發明者たり、彼等の所有者たる神の活動状態に我を換置すれば也、何となれば彼等は我にかの眼以て之を視ることを得ざる、或理性的の感觸者の現在を啓示し、斯くて更に之の無形者との我が有親の義を豫想せしむれば也。

親愛なるラファエル君よ、之の眞理を確めんと欲せば、請ふ遡りて之を究めよ、抑も人間の靈魂の各状態は其の何れ

るを問はず、必ずや物質界の何ものによりてか、表現せらるべき或一つの比喩を有す、而して獨り藝術家及び詩人のみならず、抽象的なる思想家すらも亦誰か此の無盡藏なる寶庫より汲まざる者のあるべき、見よ活潑なる活動を我等は火と名づけ、滌々として一切を渦巻き去る時なるものを流と呼ぶ、又永遠は圓を以て表せられ、秘密は夜半の蔽ふ所となし、眞理は太陽の中に住すとせらる、然り我は人間の靈魂の未然の運命すらも物質界に存する不明なる託宣の中に豫め告らるゝことをすらも幾分か信せんと欲す、萬物の母たる「地」の胎より植物の芽を發生せしむる各々の來らん春

は「死」の氣遣はしき謎語に就きて我に参照を與へ、又永遠の死に關する我が不快なる心遣を辯駁す、冬には凍りたる如く我等に見ゆる燕は陽春に至りて再び蘇生し、死せる蛹は胡蝶と化して新に若返り翩々として花間に舞ひ、我等に不
死の適切なる比喩を與ふ。

森羅萬象は皆悉く興味深くなりぬるよ——ラファエル君よ、今や萬物は悉く我が周圍に殖民し、さしもに廣き自然界も我に取りては一つの無住なる荒地だにあるなし、我一つの躰を發見する所、其處に亦一つの精靈を豫想す、——我一つの活動を注目する所、其處に亦一つの思想を付度す。

天下何處にか死者の埋められて横るあるか、
天下何處にか蘇生者の在らざる所あるか、

とは實に全能の女神が尙ほ彼女の活動によりて我に語り
給ふ言葉にこそ、あゝ我冀くは神の遍在の眞理を覺らんか
な。

觀念觀

總ての精靈は皆圓滿なるものゝ爲に牽引せらる、總て—
斯く謂はゞ疑あらんも毫も除外例なく—總ては彼等の有
せる力を自由に發表することを得る状態に達せんとて努

力す、總ては彼等の活力を發展し、又彼等か善として卓越と
して、感興あるものとして、認識する一切をば自己に牽引し
自己に集合し、自己に所有せんとする其通的衝動を有す、美
と眞と卓越との觀照は誠や此等の性質の瞬間的の所有とも
謂つ可し、由來我等は認識する如何なる状態にも我等自身
之に入ることを得、然れば我等が之を思考に上げせる瞬間
に於ては、我等こそ其徳義の所有者たり、其行爲の興起者た
り、其幸福の内所有者たり、更に進みて我等自身其感覺の對象
にてある也、我がラファエル君よ、決して曖昧なる賛否二重
の意義を有する笑によりて我が此の言を誤解し給ふこと

勿れ——此の假定こそは私の後段に説かんと欲する總ての思想の原づく基礎なれば、我は自己の學説を述べ了る爲に豫め此の點に於て君と其思想を一致せしめ置くの要あれば也。

幾分か之に類似せることをば内感は既に各人に語る例へば我等が寛大、勇氣、智慧等の行爲を驚歎する時、我等も亦皆同様の美事を爲すに耐ふる者なりとの自覺竊かに吾人の心中に動き來らずや、而して此の種の美談を聴くの際、我等の双頬を染むるかの氣高き潮紅は吾人の心中の「謙遜」が「驚歎」の前に慄ゆるが爲ならずとせんや。

加之こは我等の本質が正に獲得すべき筈なる賞讃に對して狼狽する結果なることを打ち明かす也、然り我等の身體すらも此の瞬間に於ては行爲者の舉動に識らず、調子を合す也、豈之れ我等の靈魂が此の状態の中に遷れるを證せずや、ラファエル君よ、君は嘗て英雄の美談が衆人の會場に於て或讀者によりて物語らるゝを聽きて、讀者自身が先づ自ら其英雄に對して其香を焚き、彼自身が其喝采を竭すが如きの觀あるを談者の面に見しことなきか、——若し其れ君にして談者たらば此の光榮ある幸福の迷より君の心の永遠に醒ざらんことを冀ふなるべし、ラファエル君よ、君

は斯く謂ふ、我自身が、單に親しき友人等との團樂に於て美
 はしの物語、巧妙なる詩歌など誦する時にすらも、如何に
 活潑に其心を激するかを經驗し給ひしならん、あゝ彼等我
 は唯々造物主が誦者の上に賜ふる月桂冠のみは之を君に
 見せしむることを許し給はざるを遺憾とす、斯かる事情あ
 るが故に世間に於ては一般に道義に對する迅速且つ内密
 なる藝術的良心を目し、之を以て道義に對する大なる天才
 なりとす、又之に反して道義に感動すること困難に且つ遲
 き人々の心をば貶するには敢て假借する所なき也。

君請ふ之を拒否すること勿れ、圓滿をば活潑に認識する

際には、頑冥不靈の惡漢をすらも屢々善に對する高さ感慨
 が之を遷し、小心怯懦なる弱者をすらも時あつてか高さへ
 ルクラスの熱情の燃やし盡すことあると、我は次の一事
 を確信す、藝術家の理想の最も幸福なる瞬間に於て、哲學者
 及び詩人は、正しく彼等が投影せんと企つる偉大なる人々
 其者なることを、——悲しい哉然れど精神の此の醇化は多く
 の人々にありては之が血液の活潑なる循環によりて、將た
 想像力の烈しき奮興によりて急激に喚起されたる不自然
 的狀態なれば、聽て他の各種の魔術の去ると共に、そも亦
 消え失す、斯くて心は疲倦して容易に賤しき情慾の專制に

降伏するに至る、然り我は益々疲倦してと言ひぬ、——何故に斯くは言へるぞとなれば、善より惡に墮落したる底の罪人の一般に亂暴的なること、道義に叛する背教者は常に其良心に呵責せらるゝが爲に、唯罪惡の腕に於てのみ、幾らか愉快を貪ぼることを得るものなることは、世間一般の經驗の吾人に教ふる所なれば也。

親愛なるラファエル君よ、以上の所論に由りて我は他人の状態を感ずることは我等自身を感ずると同一なること、又圓滿の觀照は能く其瞬間に於て之を我等の有と化するること、及び眞理と美と徳義とは畢に自己の醇化の意識中

に入り、其中に融化して其内容を豊富にすることを證明せんと欲したり、而して又實に之を證明し得たりと信ず。

我等人間は最高者の智慧に就きて、彼の恩恵に就きて、彼の正義に就きての觀念を有し、——然れども彼の全能に就きては然らざる也、見よ彼の全能を表示せんが爲には我等は「虛無」神意「何物」かてふ三個の相連れる斷片的觀念を以て自ら助くるに過ぎず、荒く又暗黒なりし時、——神宣し給はく、光よと——斯くて光なりぬ、我等にして神の活動的なる全能力の眞正の觀念を有せば我等も亦彼の如き創造者たり得ん。我が認識する各々の圓滿は我が有となりぬ、我は我自ら

を愛するが故に彼等の幸福を慾望す、自然界中の圓滿は物質の性質にあらずして精靈の性質也、一切の精靈は彼等の圓滿なることによりて幸福也、我は一切の精靈の幸福を慾望す、何となれば我は自我を愛すれば也、我が自我に表象する幸福は我が幸福となる、故に此の表象を呼び醒まし、之を多様に變化し、之を高むることは其責我に在り、——然れば我が幸福を擴張し増殖するは我自らに在りて存す、畢竟我が外に現はるゝ如何なる美も、如何なる善も、如何なる樂も、我之を自我の中に現はし、我之を等閑に附し、又之を破壊する也、——我は我自らの幸福を慾望するが故に、又他人の幸福を

も慾望す、他人の幸福を慾望することを稱して我等は之を善意と呼ぶ。

愛 觀

我が優良なるラファエル君よ、請ふ今我をして我が周圍を顧みしめよ、あゝ我は今や茫々として際しなき花野の唯中にぞ立つ、見よ空は高く、霧は落ち、清き日光は一切の我が觀念を明らかにしぬ。

あはれ愛てふ——受造物中の生命ある最も美はしの現象よ、精靈の世界の尤も力強き磁力よ、敬虔の念と氣高き道義

心との泉よ——汝唯愛のみぞ獨り、人格の刹那的轉換と、本質の變換とを能くする、至上者の牽引力の唯一の反映なる。

我憎まんか之れ我自ら我より何ものかを取り去る也、我愛せんか之れ我自ら我が愛するものを増し加ふる也、他人の罪を宥免するは之れ一旦外に出したる所有物を再度に發見することとなる。——人を憎むは彌久的の自殺也、然ればかの利己主義の人々程世にも極めて憫然なる受造物はあらず。

ラファエル君よ、君が我の最終の抱擁を解き給ひし時、我が靈魂は碎けぬ、我は我が美はしの半を失へるを泣きぬ、君

よかの清幸なりし夕——君も亦能く之を記憶せん——かの時我等の靈魂は宛として熱火の如くに相觸れぬ、斯くて君の總ての大なる感情は我のとなり、我は唯君の卓越を以て我が終生の寶となす、——君を愛することは、君に愛せらるることよりも我は驕りなりとなす、何となれば前者は識らず識らず我をラファエル君に化すべければ。

愛の永遠なる歡ばしき盟約に

我等の心を結ぶべく餘義なくせしは
之の全能なる衝動力にてはなかりしか
ラファエル君よ君の腕に凭りおほし悦よ

我は大なる精神的なる天照日の女神の御座に
悦び勇みつゝ旅路をば急がん

幸福なれや幸福なれや我は君を發見しぬ
百萬人の中よりしてぞ君を撰みいでぬる
而して百萬人の衆の中にして君は我が有なり
荒き混渾の假令再び歸り來て
原子は原子と相反撥し合ふことありとも
我等の心は永遠に之を脱離せん

我は爛々として焰に似たる君の眼より
我が悦の反射の光をぞ飲む

我は唯々君の中に於てのみ己を驚歎す
君あるが爲に地は更に美はしく
君あるが爲に天は更に麗らけく
歡喜の素振にて輝やかに照り渡る

あゝ愛の胸にあゝあゝ愛の胸に
艱苦の嵐より更に楽しく憩はしめんとして
「悲哀」は氣遣はしげなる涙の重荷を投ず

拷問的とすらも名付くべき痛き誘惑も

我がラファエル君の靈眼の中にありて

所詮は其快き涅槃を求めずてやは

一切の受造物の中に人は唯獨り我のみなりもせば

我は巖石の中に靈魂あるべしと想ひ

彼等を抱擁して恐らくは接吻せん

我復た呻吟しつゝ大氣に嘆かんに

そこの洞の幸ひに答ふるあらば

妙なる同情に愚かしきまで悦ばん

愛は同調同質の靈魂と靈魂との間に起らずして、調和したるものゝ間に起る。我は我が情感をば君の情感を鏡となし、怡々として之を再歸的に認識す。若し其れ我に缺乏する美質に至りては、燃ゆるが如き慕心を以て更に高き君が資質に纏はる。思ふに友誼と戀愛とは其原則一なるが如し、温和なるデスメーナは其冒險の故をもて彼女のオセロを戀ひ、益荒雄なるオセロ將た彼女の彼が爲に泣きし涙の故をもて彼女を戀ひぬ。

我等の戀人等が爲すらん如く、各々の花各々の離隔せる

星辰、各々の蟲、將た各々の豫想すてふ更に高等なる精靈等
 が其胸と胸とを相壓する——全き自然の抱擁と謂ふ珍妙な
 ると偶々世には起るものぞかし、君は我意を理解し給ひし
 か、ラファエル君よ、自然界中の細大を漏らさず、一切の美、偉
 大、卓越を拾集し、又之の多様なるものゝ中に大なる統一を
 發見する業に於て大に成功せる人てふものは、既に痛く神
 性に接近せるものと謂ふべし、實にや全き造化は彼の人格
 の中に流れつゝあり、然れば各人皆一切の人間を愛せば、各
 人其れくゝに各自獨立の宇宙を有せる也。

我等の時代の哲學は——我は之を懼る——此の教理に違反

せるを、見よ我等の思考的頭腦の多くは、此の天的なる衝動
 を人間の靈魂より嘲笑し去らんとし、神性の印象を拭ひ去
 り、又其精力及び其高尚なる熱情を、かの小膽なる「無情」てふ
 ものが吐く冷たき死の息氣の中に溶くるに至らしむる傾
 向なきか、彼等自身の品格なき奴隸的情感の中に、彼等は遂
 に善意の最も危険なる敵手たる利己主義に陥りぬ、何と
 なれば彼等の狹隘なる心には餘りに神的に考へらるゝが
 故に之を現象なりと説明し去らんとするものなれば也、見
 よ彼等は涸渴せる利己主義よりして彼等の慰安なき教理
 を紡ぎ出し、而して自己の制限をば造物主の標準となす、

之れ宛然として其鐵鎖の鏽々たるが中に縛せられつゝ不
 靈にも猶ほ自由なりと叫ぶ、墮落し果てたる奴隸にも似た
 り、一人二人の者が彼等の價值に落膽すればとて、何ぞ全種
 屬の者が其價值をば捨つべけんや。

我は臆面なく大膽に告白せん、我は非利己的なる愛の實
 在を信すと、彼女にして若し在らざば、あゝ、我が事は畢んぬ、
 我は斷乎として神性と不滅と道義とを見捨てん、何となれ
 ば我にして一旦愛を信することを廢せんか、我は最早斯か
 る希望に對つて何等の證明を有せざれば也、最後に鑑みて
 一言せん、専ら自己のみを愛する靈魂は、無限の空間中に浮

遊せる一つの原子たるに過ぎずと。

犠 牲 觀

然れども愛は彼女の性質に適合せりと見ゆる効果を實
 際に産出したたり。

我が他人を幸福ならしめんと欲してなす犠牲が不思議
 にも我自身の幸福を増加する基となるは實に感謝すべき
 こと也——況して其犠牲が我生命なるに於てをや、爾かして
 歴史は寔に斯かる犠牲の幾多の例證を有す——若し其れ不
 幸にして我一朝ラファエル君を死の危険より救ふを要す

ることあらば、我は身命及び一切のものを君の爲に擲たんことを切に感ず、あゝ我等は我等の幸福の總和を増加する爲に、死を以て其方法とすることは如何にしてか可能なる。又如何にして我が生存を廢止することが、我が本體を富裕ならしむることと合致し得るか。

不死てふ假定は能く此の矛盾を解釋す——然れども之の假定は永久に此の現象の中に包含せられたる神恵を醜くするもの也、蓋し報酬せらるべき未來界に對する回顧は愛を除却す、世には絶滅の危険の上にも亦同じき犠牲を供する、換言すれば不死の信仰無きも尙且つ達せらるゝ道義な

かるべからず。

現在の利益を永遠の利益の犠牲となすは蓋し既に人間靈魂の一大醇化なるは疑ふべからず——之れ利己主義の最高階級也——然れども利己主義と愛とは嘗て其領域の相交るが如きことなき、至極相似ざる兩種に人類を區別す、利己主義は其中心點を自己に設け、愛は永遠的全一者の中心に之を植う、愛は統一を目的とし、利己主義は究竟孤獨的也、愛は花咲く自由邦の參政者たる大市民的女性也、利己主義は荒地の國の專政君主也、利己主義は感謝するものゝために撒き、愛は感謝せざるものゝ爲に撒く、愛は與へ、利己主義は

借す——愛は審判する真理の女神の玉座の前に在れば、次の瞬間に快樂を得るとも或は殉教者の玉冠の榮ありとも毫も其意に介する所なし、又此の世に於て或は來世に於て其利子が落ち來らんとも毫も其意に介する所なし。

我が親愛なるラファエル君よ、請ふ遠隔せる幾多の世紀の上に全人類に對して福祉を與ふる女性「真理」のことを想起せよ——更に此の「真理」なるものが彼女の信仰告白者を死に追放し、其者死するに至りて始めて漸く證明せられ、漸く信せらるゝに至ることを附加せよ、次に爛然たる總括的な日光的眼光を有せる天才と、其愛に對する崇高なる天賦

とを考へ、其天才の心の中に其大活動の完成せる理想を觸起せしめ、——彼が將に造らんと欲する一切の幸福を彼の胸中に小暗らき豫想となして過ぎ往かしめよ、——且つ現在と將來とを同時に彼の精神中に合致せしめよ、——然り而して此の人物が猶ほ未來生活に關する指示を要するや、否やを自問自答せよ。

這般の一切の感覺は彼の人格によりて混化せられ、彼の自我によりて唯一の中に悉く流入せん、彼が今や自ら考ふる人類とは彼自身のこと也、彼は事人類の幸福の爲なれば其生命を忘れ、又之を輕んずること猶ほし、一滴の血を流す

が如けんのみ、—彼たるもの豈人類即ち彼の大我の健康の爲に速かに其血を迸らしめざらんや。

神 觀

宇宙に存する一切の圓滿は神の中に悉く統一せらる。然り神と「自然」とは全く平等なる二大立物也。

神的本體の中に共在的に存在する調和的活動の總額は、此の本體の摸像たる自然界に、無數の度と分量と階級とにて孤立す、「自然」請ふ我に之の形像的の言葉を許せ、「自然は無數に分割されたる一の神也。

恰も分光器が白き光の條を七種により暗き光線に分割する如く、神は無數の感覺的なる本體に分割せらる。又七種のより暗き光線を融合して再び白色光に復することを得ると同理にて、是等一切の本體の統一の上に神は現出し給ふ。蓋し自然組織の現存の形式は正しく一大光鏡の如きものにして精靈の無數の活動は一に簡易なり神光の無限なる色彩遊戯に他ならず、全能者何時にても此の分光器を碎かんと欲せば、忽ちにして全能者と宇宙との間の堤防は撤回せられ、一切の精靈は忽ちにして無限の中に歸し、一切の原子は一大調和の中に流れ込み、一切の小川は一つの大洋

の中に還没し至らん。

三二

原素間の引力關係は自然界の物體的形式を成立せしめぬ、之れと同様に無限に變化し又繼續する精靈間の引力は究竟彼等の分離の廢止を導かざるべからず、換言すれば(我之を敢て發言し得るかヲフアエル君よ)神を現出するに至らざるべからず、斯かる引力は即ち愛也。

我が親愛なるヲフアエル君よ、斯るが故に愛は我等が神性に攀ち上るべき梯子也、諾否を待たずして無意識的に我等は實際之を目的として進行しつゝある也。

憎まば我等は走屍行肉の群のみ

愛しつゝ相互に抱擁せば我等は神々にて

樂しき愛の鏈鎖を渴望する輩なり

千重の段階を造りつゝ上に嚮ひて

造化せざる無數の精靈共は

妙に奇すしき行列を組みて練り行く

腕に腕を扼しつゝ高さより高さに

野蠻より最後の大天使の座にも達すなる

希臘の哲人先見者に至るまで

我等は心樂しき輪形踊りをしつゝ彷徨ふ
時空も死しつゝ没すめる

永遠の輝きの無邊際的大海の中に

宇宙の大なる主は伴侶なかりき

缺乏を感じ給ひて彼は精靈等を送りぬ

之れなん彼の天福の鏡なる

遮莫至高者は自己に比ぶべきものを見出し給はざり
き

此處に於てか絶大なる虚空藏の爵の中よりぞ

女性無限は彼に沫立ち出でぬ

我が親愛なるラファエル君よ、愛は爵位を剝奪されたる
黄金王を碌々たる石灰の中より再び位に据ゑ直し、永遠を
無情より、又永遠不易の大神託を時劫の破壊的なる焚燒の
中より救ふ摩訶不可思議の力にこそ。

總 觀

請ふ我等をして卓絶せるものを洞觀せしめよ、然れば彼
等は我等の有とならん、請ふ我等をして高尚なる理想的の

洞觀と親しましめよ、然れば我等は同胞的の愛を以て相互に交はることを得ん、請ふ我等をして美と悦とを植ゑしめよ、然れば我等は美と悦とを收獲し得ん、請ふ我等をして明白に思考せしめよ、然れば我等は燃ゆるが如く愛することを得ん、天に在す汝等の父の完全さが如く完全かれと、我等の信仰の創立者は謂ひぬ、薄弱なる人性は此の戒めを聽きて色蒼褪めぬ、故に彼は更に之を明白に説明して曰く、汝等相互に愛せよと。

智慧てふ日の如き眼せる

大なる女神は退きぬ

愛の女神に捧げよや

神性の大御位にと

誰か險はしの星の途を

勇敢に汝に先導して往くか

誰か聖堂を打ち開きて

墳墓の罅隙を通して

汝にエリシユームを示せしか

女神の我等を招き給ふにあらずば
我等如何で不死たり得んや

精靈等も亦此の女性なしには

如何でか主をば求め得んや

愛の女神あゝ愛の女神のみぞ唯だ

自然の父君の御座に

精靈等を導き給ふなれ

我が親愛なるラファエル君よ、斯くの如きものは實に我が理性の信仰告白也、我が企てたる創作の走り書的の輪廓

也、君自身が我が靈魂中に撒き給ひし種は、今君の見らるゝが如く、斯く生長しぬ、君請ふ君の學徒に對して嘲けらんと欲せば之を嘲けれ、悦ばんと欲せば之を悦べ、或は羞ぢんと欲せば之を羞ぢよ、そは唯だ君が心に任かせん、——然れども此の哲學思想や能く我が心を醇化し、又能く我が生涯の遠景を美化しぬ、嗚呼我が優れたる友よ、君は我が結論の全き稜敷が一つの根據なき蜃氣樓に過ぎること果して有り得べしとするか、——我の此處に描き出したる「宇宙」てふ女性は恐らくは汝のユリウスの腦中より他に何處にも實在せざるべし、——恐らくは幾億年の後、豫言せられたる智者が其椅

子に坐すべきかの審判の日に、我は其真正なる原本を瞥見して我が書生的記述を慚愧の中に寸断するともやあらん。——此等のこと皆適中して可也、我は實に之を期待す、然れども實際がよし我が夢想に類せずとするも、實際は更に感興深く、更に莊嚴に吾人を襲ひ來らん、嗚呼我が理想豈如何で永遠に在すなる創造主の理想より美はしからんや、豈如何で彼の雄大深玄なる藝術が可死的なる鑑賞者の期待に讓るが如きことあらんや。

附 録

神 明

齋木仙醉述

緒 言

幽賛すべきかな神明の大徳、適歸すべきかな神明の福祉、世界の民をして其祭を同らし、其賛美を同うする眞の同胞と化せしむるものは、絶對的宗教の力に存す、而して其光榮なる名は正に神明を以て之に冠すべき也。

神明は宇宙自然の大道也、然れば儒教も、耶蘇教も、佛教も

皆共に之を公有す、時は近づきぬ、純粹明白に宇宙の大道を提げて立ち、天下永遠の精神的基礎を定むべきの時は近づきぬ、翻つて惟みれば東西兩洋の文明を集中せる我が旭日島帝國は、其武威を四海に輝やかすと共に、玲瓏として東天に聳ゆる芙蓉峰の如き、圓滿卓絶なる宗教思想を發揮して世界を醇化すべきにあらずや、我は徳薄く學足らざる身なれども、之を以て終生の志となし、研鑽又研鑽、遂に廓然として大覺せり、之れ斯の福音を世に公にする所以也、世の志士仁人、冀くば大に同情を垂れ、悉く來りて宗教改革の壯舉に參せよ。

聖靈神母論

神にして神なる我の神なれや

我が靈は愛人は我の子

余嘗て琵琶湖上の天啓と題し數年前一文を草せり、蓋し世界の諸哲學者琵琶湖に會して各々其極意を詠む趣向にて、例へば釋迦は「暗も消え光も失せて我が胸の大虛に懸る一輪の月」スピノーザは「滄海の波こそ千々に異れと思へば一つ滄海の水」等の句を詠じ、諸説紛々として定まらざる時自ら神意を詠じ給ふを以て大團圓となせり、冒頭の歌は即

其れ也。

余は忽然として電光石火の間に一大天啓を受けぬ、何ぞや曰く聖靈は即ち母にして、所謂神の三位一體とは父徳、母徳、子徳の一心に歸するの謂なるを、即ち歌を作りて大に之を世に鼓吹せり、歌に曰く、

基督説きぬ父の神

我は説かなん母の靈

清きこゝろの幼兒と

なりて眼を開き視よ

愛と恵に充ち給ふ

み情深き母君は

花の顔美はしく

笑ひて汝を抱き給ふ

あゝ神は愛愛は神

あゝ倫は愛愛は倫

善なる聖父美の聖母、真なる聖子の倫に入れ
と、余は此の説を弘むる爲に一雑誌を起し友人の助けの下に之を發行し、海老名先生、姉崎博士等を歴訪して賛成を求めたり、其他雑誌新人は余に此思想を天下に公にする便宜を與へ、余が親友小島洒風君は雑誌婦人界に於て懇切なる紹介を與へ、又余が女友瀧山由子、小原チセ子の兩姉は多大なる金品を投じて之を助けたり、又余が愛友吟鶯猪股達也君は同志として盡力せられたり、爾來幾年月、朝に夕に此の問題は我が念頭を去らず、夢にだも之を忘れざる也、余が測らずも大道の縁日の古本屋にて買求めしシルレルの零冊

を彼が百年祭の噂高さに促されて一讀すれば、彼又余に類する思想を抱けるを見、大に之を悦び、遂に接神術を譯するに至りたる也、以下愈々聖靈即母論の證據を掲げん。

舊約書中の證據

(一)元始に神天地を創造たまへり、地は定形なく曠空くして、黑暗淵の面にあり、神の靈水の面を覆たりき、(創一章一、二節)古來より宇宙を以て一の卵と見做すことは東西其軌を一にす、而して此の文にある覆ふの字が雌鳥の其翼を以て卵を温むる時の状態を寫せるものなることは聖書學者の

皆首肯する處也、之れ聖靈の母徳を有する一證也。

(二)神言たまひけるは我儕に象りて我等の像の如くに我等人を造り之に海の魚と天空の鳥と家畜と全地と地に匍ふ所の諸の昆蟲を治めしめんと、神其像の如くに人を創造給へり即ち神の像の如くに之を創造之を男と女に創造たまへり(創一章二六、二七節)此の文に於ける神てふ原語はエロヒム也、然るに此の語はイムてふ複數の語尾を有せり、故に英語にてはゴッツと譯されたり、然るに此のエロヒム神が我等の像の如くに人を創造らんと謂ひつゝ、之を男と女とに創造せしを見れば、神の中に女性あるや疑ふべからず

之れ文法上公平なる議論也、之れ聖靈の母たる第二證也。

新約聖書中の證據

(一)イエスバプテスマを受けて水より上れるとき天忽ち之が爲にひらけ神の靈の鴿の如く降て其上に来るを見る(馬太四章十六節)鴿は其の温順の故を以て古來のシンボリズム(表號)に於て女性を現はすものとして使用せらる。天の父降臨の母、河上の子基督之れ聖三位にあらずして何ぞや。

(二)マリヤ天使に曰けるは我いまだ夫に適ざるに如何にして此事ある可きや、天使こたへて曰けるは聖靈なんぢに

臨る至上者の大能なんぢを庇ん是故に爾が生むところの聖なる者は神の子と稱へらるべし(路加一章三四、三五節)聖者としての基督は血肉に由りて生れたるにあらずとする。こと福音者ヨハ子の謂ふが如しとせば明白に聖靈によりて生れたる也、然れば聖靈は母なりと謂はざるべからず、何となれば聖靈は聖父、聖子と共に一位なれば也、或人は謂はん、聖靈は唯聖父の力のみと、然り然れども論者は知るか、抑も陰とは陽の勢を謂ふとは其の本來の定義也、然れば神は無位なりと謂へば止む、苟も父を謂うて母を謂ざるは非也、(二)未だ神を見し人あらず、惟うみ給へる獨子すなはち父

の懐に在者のみ之を彰せり、(約翰一章十八節)茲に父の懐と譯せる字は獨逸語にては之をシヨツスと謂ふ、英語のウオンブ又はブーズンと同字也、然るにシヨツスは母胎の義也、然れば福音史家ヨハ子は三位一體を以て圓と圓虛と圓心とに當るものと考へたるが如し、然らば其中心が子たり圓が父たれば圓虛は母たること明瞭ならずや、余は故に謂ふ父の懐とは即ち母を意味すると、而して其神子を化育するものは無論聖靈なれば聖靈は即ち母也。

(三)我父に求ん父かならず別に慰る者を爾曹に賜て窮なく爾曹と偕に在しむべし、(約翰十三章十六節)余は思ふ、聖父

は仁にして聖子は信也、而して聖父より別に慰むるものを遣はさんどあるは、之れ愛なる聖母即ち聖靈なりと、尙ほ茲に注意すべきは信なる基督は「我父に求ん」又は「父かならず」等の希望に充てる語を發せられたり、之れ大に意味ある語にて信は必らず望と伴ふことを明らかにするもの也、信を息子とすれば、望は息女也。

(四)それ道肉體こころと成て我濟の間に寄れり我濟その榮を見に實に父の生たまへる獨子の榮にして恩寵と眞理にて充り、(約翰一章十四節)基督は聖靈を稱して慰なぐさむるもの訓師又は眞理の靈と呼ばれたり、然れば茲に所謂恩寵と眞理にて充てりとは

無論聖靈の恩果に充ち給ふの意也、然るに獨逸語にては眞理のことをデーイー、ワールハイトと呼び、恩寵のことをデーイー、グナーデーと呼び、共に女性の冠詞を有す、之れ又聖靈の母たるの傍證也。

(五)噫エルサレムよエルサレムよ預言者を殺し爾に遣さるゝ者を石にて撃もものよ母鶏の雛を翼の下に集る如く我なんぢの赤子を集んとせしと幾次ぞや然と爾曹は好ざりき(馬太廿四章三七節)基督が父を人類に現はせりとは仁を人類に現はせりとの意也、決して形態的に父を現はせしには非ず、然らば茲に引照せる基督の語を見れば基督が母的

衷情を餘蘊なく發揮し給へるを見る、然れば神の中の此の母的性格は聖靈を以て之に當るものとせずして可ならんや。

(六)婦子を産んとする時は憂ふ其期いたるによりてなり、然れど已に生ば前の苦をわする世に人の生れたる喜樂に因てなり、(約翰十六章廿一節)基督は人類救済の若痛を神聖なる産苦に比したり、豈之れ眞理の靈なる母が新生を人類に與へんとする爲の苦痛にあらずして何ぞや、基督は既に此の深刻なる母的衷情を吐露せり、天下のクリスチアンにして尙ほ聖靈の母なるを否定するものあらば、あゝ余は顔

を蔽うて卿等の爲に泣かんのみ。

(七)我が小子よ我なんぢらの心にキリストの狀成までは復び爾曹の爲に産の劬勞をなす(加拉太四章十九節)保羅は加拉太人に對ひて小子よと呼び更に爾曹の爲に産の苦しみを爲さんと謂ふ豈之れ宛然として母的態度にあらずや(八)然と上に在どころのエルサレムは自主にして是われらの母なり(加拉太四章二六節)天のエルサレムを保羅は明らかにかに母と呼べり而して其のエルサレムの生々力は即ち聖靈に他ならざる也。

(九)聖靈も亦われらの荏弱よわを助く我儕は祈るべき所を知ざれども聖靈みづから言がたきの慨歎を以て我濟の爲に祈りぬ(羅馬八章二六節)世にマーザー、オプ、サロウと謂ふ成句あり即ち悲哀の母との意也今保羅が聖靈の大悲の心に就きて語れる語氣を察するに明白に之を母と謂はざる許り也。

(十)誠に實に爾に告ん人もし新に生ずば神の國を見こと能はじ、ニコデモ彼に曰けるは人はや老ぬれば如何で復生るゝ事を得んや再び母の腹に入て生る可んや、イエス答けるは誠に實に爾に告ん人は水と靈とに由て生ざれば神の國に入と能ざる也、肉に由て生るゝ者は肉なり靈に由て生

るゝ者は靈なり、我なんぢに新に生るべき事を言しを奇と爲なかれ、風は己が任に吹なんぢ其聲を聞ども何處より來り何處に住を知らず凡て靈に由て生るゝ者も此の如し、(約翰三章、自三至八節)ニコデモは基督より新生の福音を聞きて「人はや老ぬれば如何で復生るゝ事を得んや再び母の腹に入て生る可んや」と嘆息せしに基督は莞爾として之に應へしこと畧ぼ下の如し、新生には肉體的の母胎を要せず、神の靈氣こそ即ち靈的母胎也、肉眼之を見ること能はざれども春風の一過する所草木生々する如く、一切の衆生は生命の水と聖靈の暖氣とに由りて生れざるはなし、之を以て基督

の聖靈は母なりとの宣言と見做して不可なき也。

其他「凡そ神の靈に導かるゝ者は是即ち神の子なり」(羅馬八章、十四節)又は「まして天に在す爾曹の父は求むる者に聖靈を予へざらんや」(路加十一章、十三節)との言葉の前後の如き何れも聖靈の母たる事を證せざるはなし、尙ほ余は現行の讚美歌を引照して之を證せんと欲す。

やはしき鴿よ 愛のつばさに

みたみをおほひ なぐさめたまへ

之れ組合教會等に用ふる讚美歌百十七番の五節也、基督のエルサレム人に對する母的衷情の吐露と此の聖靈の讚美

どが如何に照應するかを見よ。

あゝみたまよ くだりまして

ねぎごとを さこしめし

みかみなる すくひぬしを

日に夜に 見させたまへ

之は同讚美歌百十四番の一節にて、聖靈の靈てふ漢字が其の下に巫なる文字を有すると比較して考ふれば慰訓師てふ意義に就き思半ばに過るものあらん

うさくもを ふきはらひて

あまつ日を かゞやかし

はるかせの かをるさどく

この世を なさせたまへ

前と同じ番なる此の節が如何に優美にして、天地も震ひ動きてふ父なる神の稜威に比して大なる差異あること、之れを明言すれば後者の男性的なるに比して前者の女性的なること明々白々たり。

又或る英語の讚美歌に

聖なる哉、聖なる哉、聖なる哉

あゝ聖父と聖靈と聖子とよ

三つを一如とせる神秘的なる神の頭よ

と謂ふがあり之等は余の思想に非常に接近せるを覺ゆ、以下請ふ基督教以外の論證を掲げて、余の主張が世界の公論なることを證せんと欲す。

世界的偉人の證言

(一)オーゴスチンは大神がプロビデンス(攝理者)と共に坐しつゝ宇宙を主宰しつゝあることを書けり、而してプロビデンスは羅典語のプロビデンテイヤより來る、之の語は女性也。

(二)大詩人ダンテは其の神曲に於て、地獄篇には父なる神

の正義を現はし、煉獄篇には子なる神の智慧を現はし、最後に天國篇には聖母マリヤを描きて神の愛を現はせり、正義と智慧と愛とはダンテの三位一體也、而して愛は之を母に比せんとするが如し。

(三)ゲーテは其の光榮ある大傑作ファウストに於て所謂久遠の女性なるものを謳へり、ファウスト劇の天の序幕なるものに於て、太陽を日の女神として讚美せり、あゝ天照す太陽の古きながらの調べにて同胞群るゝ星界に、競ひの歌を響かせて、定められたる旅路をば、轟々として畢るかな、あはれ女神の其み歌、群る天の使等に、力を

こそは與ふなれ、假令誰とて女神をば測り知ること能はぬも、最も不可思議の御業やは、開闢の日の其の如く、燦然として輝やけり

と、之れ獨逸語にて太陽のことをデイト、ゾンチーと女性に稱ふるを應用して斯くは謳へる也、次にゲーテは又自然を母と觀照せり、

あはれ何たる觀物ぞや

あゝ然れど唯觀物のみ

無限無量の大自然

汝が何處をか捉ふべき

無限無量の大自然

汝が乳房は何處にぞ

天だも地だも懸るなる

生命の泉あゝ其れに

潤ばめる胸は喘ぐなり

汝は湧きつゝ流るめり

然るに我は徒らに

あゝあゝ斯くも渴くべき

之れ實に吾人の主張を謳へる大なる詩歌也、其他彼は所々に於て此種の口吻を漏せるを見る、且つ彼が「ファウスト全篇を結ぶ大團圓の辭として、久遠の女性我等を引き給ふ」と謂へるは、即ち愛てふ女神を鼓吹したるなり、其れ「ファウストは十九世紀に出し、一大預言書なり」と稱へらる、而して愛の女神を説くこと斯の如し、ゲーテと謂ひ、シルレルと謂ひ、將た不肖余と謂ひ、自ら思を此處に馳するに至りしは決して偶然にあらず、天下公共の眞理なれば也。

(四)スピノーザは世界の大家にして、其の議論實に的確にして、一大水晶を觀るが如し、彼而かも曰く、絶對なる神は唯一の無限なる觀念を有し給ふと、然るに觀念なるものは實躰に比して女性的なるもの也、且つスピノーザは神に對する理性的の愛(アモール、デイ、インテレクチュアリス)を説けり、然るにスピノーザによれば神は圓滿なる幸福の本源なるが故に之を愛する也、而して其の愛や合理的ならざるべからずと、此のスピノーザの格言を余の流義に従ひて解釋すれば神は即ち主躰にして陽的也、愛は勢用にして陰的也、而してインテレクチュアリス即ち理性的てふ文字は、内

部を」と謂ふ字と「讀む」と謂ふ字との集合なるが故に之れ中性なる子を示すものと謂うて不可なき也、基督教の根本原理たる「神は愛也」との文字とスピノーザの神に對する理性的の愛とは畢竟同一事實也、何となれば神は父、愛は母也、は判斷力を表する辭にしてスピノーザの所謂理性的てふことに相當する也。

(五)佛教には因縁果の教理あり、釋迦は自ら一大事因縁の爲に生れたりと謂へり、而して佛教中因縁果の論を以て最も有名なるは人の知る如く大乘起信論にて、海水を以て最と喩へ、風を以て縁に喩へ、波を以て果に喩ふ、余嘗て自由詩

を作りて曰く、

真耦以如如孕相

一切縁生即子女

衆生悉有同生縁

俱念真如愛父母

と蓋し真如を眞實如常と觀じ其間の消息を述べたる也

(六)一休が作れりと謂ふ謠曲山姥を見よ、一休は月を以て山姥に喩へ、之を縁として真如を覺らしむる姥なりとなせり。

(七)觀音菩薩は元來觀自在菩薩なれども一般に之を女身となせり、之れ菩薩てふものが覺者有情と謂ふ意義を有する必然の結果也、然れば佛界の圖を見ても佛は常に男性的

に描かれ、菩薩は常に女人の姿を以て躰現せらる。

(八)希臘には眞善美を以て理想の要素となせり、此の中美は何人も之を女性的なりと謂ふに首肯せん、シルレルの女神の思想の如き確かに希臘思想に負ふ所鮮少なからざるべし、而して希臘が女神思想の本地たるは今更之を説くの要無らん。

(九)獨逸には名詞に男性、女性、中性の冠詞を附す、デヤ、デイ、ダス即ち是也、而して之の習慣たるや遠く之を印度の言語に起原を有すと謂ふ、而して印度には阿字本不生の如き又は阿吽の如き議論の流行せし所なるは人の知る處也。

(十支那には天地人三才の説あり、而してそは文王によりて乾父坤母と明言せられ、人は謂ふ迄もなく天地の子にして之に參與するものなりと考へられたり、陰陽兩儀の説の如き此處には詳しく謂はず、我が日本國に於ては天照大神の如き女性的開闢の神を有し、且つ其の三種の神器中には玉璽の如き温潤含和なるものあり、誰か之を以て特に劔に對して女性的なるを覺えずんばあらざる也。

西洋
大家

母心百人一首

ボナイゼン選集

齋木仙 醉意譯

(リヒテル)

◎ 人の胸を神の宮居と稱へ得ば母の心は聖き極みぞ

(トレーゲル)

◎ 愛し子の生命に生くる母心我を忘れて護りいたはる

(ケリー)

◎ 白銀の髪なす母は嵐吹く夜暗を照らす常夜燈かも

六九

西洋
大家
母心百人一首

◎ 渾圓なる地には母てふ美はしき言葉に愈る言葉なきかな
(カルメンシルバ)

◎ 嬰兒を腕にしかと懐きたる母の姿は世に比ひなし
(ハイルボルン)

◎ 世の中にいと婦は多けれを全き愛は母にのみこそ
(エングル)

◎ 黄金なす星とし照りて母の愛涙の谷の子をば慰さむ
(エリーエプロウ)

(ヤコビー)

● 覺束無の幼な眼に乳母は周圍につぎて天を見せしむ
(セーフエル)

◎ くるがねの地には妻より美はしく愈れるものは唯だに母そは
(ハレツク)

◎ 疲れたる生命の舟よ來て憩へ母の御胸は安き避難所ぞ
(バカノー)

◎ 故郷の土をば眞の樂園となすべきものは唯だ母の愛
(エーレンベルヒ)

乳母の愛の環光ひかりにつつまるゝ婦に増して美はしき無し

◎

(ワルリング)

里を出で復た歸り來ぬ家の子を夜な夜な待つや母の
燈火

◎

(メルテンス)

呱呱の聲あげしばかりの汝をば誰か凝視みつめて接吻し
つる

◎

(ハウフ)

母の愛は天つ照る日か草木をば恵み育てゝ花を咲か

しむ

◎

(モノツド)

母親の慈悲を一と度信せずば父親の智や二度危ぶま
ん

◎

(レイドウヰツツ)

永遠とこの神より稟けし母の役子の靈魂を天に歸すは

◎

(ゼーン)

藤衣泣くべき喪やは多けれど母の失せしに増すはあ
らじな

◎

(ハーエツク)

乳母の愛の墓石尋ねればたゞ乳母の墓石の上に

◎

(フテナ)

女王とし生れぬるとも何かせん母てふ名をば樂し
み得ずば

◎

(ミユルレル)

人生の書を繕き調ふれば母の恵を見ぬ頁なし

◎

(エツカルト)

千萬の難も子故堪へ忍ぶ母の心は死にも打ち克つ

◎

(スツルム)

夜半に醒め泣く子を唄に睡むらせて若き母そは天に

謝すめる

◎

(ヒユールゲルト)

天の母星の花野をさすらひて地の小供等の徑にぞ撒

く

◎

(シヤミソー)

エンゼルに似たる兒をしも抱くなる母のみぞ知る愛
と幸とを

◎

(不詳)

日に新日も亦新なるものはこれ乳母の愛と眞心

◎

(ザウル)

人も棄て神も捨てたる罪人の卒塔婆なき墓に母の祈るれ

◎

(ホフマン)

軍人を勇み送りし母の嘆く多く求むるあゝ祖國よと

◎

(アミチス)

白髪なる老いたる母のはゝるみにラファエルならぬ身をぞ悲しむ

◎

(波斯の詩人)

天の國は何處にありと思ふらん慈しむ母の在ます足下

(ザリス)

若き日の美まし花の環祭壇に捧げて老を忘る母かな

◎

(アダクリステン)

蒼褪めし稚兒の頭の沈みぬれば母は抱きぬ張り裂くる胸に

◎

(レオ)

生れては護りの翼長ちては希望の星となるや母そは

◎

(パウエル)

菩提樹の巢に飛び歸る子燕に倣ひて我も母のがりゆ

◎ (ヒンテルディング)

遠き國に航する船の岩に破れて先づ忍ばるゝ母の故郷

◎ (ダーテ)

獨子を腕に抱く母は艶に子等に纏はる母は尙ふとし

◎ (ボーデンステット)

白糸のまだし染まらぬ幼子の静かに睡る母の優さ腕

◎ (パールスラッハ)

幼子の生衣に繡す若き母を笑まひて照らす春の天つ日

◎ (不詳)

白銀の髪なす母ぞ我れ人の身を護ります天つみ使

◎ (ハンメル)

春のタベ子を抱きたる母のいふ地の樂園は未だ失せじと

◎ (シニューバルト)

心を造る神宣すらく紅き血の妙に流れて母心たれ

◎ (グリユーン)

くさぐさの寶出すてふ角よりも豊かなるかな母の御手の

◎ (ハーメルリング)

世の中と子とを天秤に懸け較べ我が子重しと見る母心

◎ (ヘーゲル)

慈しみ量り知られぬ乳母ぞ其子を守る護本尊

◎ (ハルリツシユ)

友垣の睦みは冷ゆることもわれ母の恵みはどはに失せじな

◎ (シルレル)

星辰の晃めく空に明らけき母なる月の美はしきかな

◎ (未詳)

夜なく〜に呼び醒ましては乳飲みし兒は在らずして
獨り起き泣く

◎ (ブロードチャンスキー)

病痾の子をば抱きて乳母のその身にかへて祈る生ひ立

◎ (ハルム)

嬰ひで紡ぎ在はせし母じや人子の一と聲に立ち抱きつ

◎ (ムート)

老いし母の髪こそ冬の雪ながら心は春の花と馨ばし

◎

(パウリー)

灰よりぞ蘇生フエニイグスの鳥の出づること母の榮は死後にしるしも

◎

(ミケレート)

世に名あるその人々を尋ぬれば孰れか母の性を稟けざる

◎

(ローガウ)

胎の中や腕にこそは限りあれ御心もては永遠に抱きます

◎

(スタデイオン)

乳母の初接吻ぞ人の子の世にも正しき洗禮オラタミなる

◎

(ソホクレス)

氣に入らぬ風もあらうに吹き流す柳に似たる母の御心

◎

(ザフイール)

母君の唇や手に育てられぬ子やは知らじな優さし心を

◎

(ブレンタノー)

世の中は暑さ寒さの定まらねど温かし母の懐

◎ (マツト)

眞玉なす清けき愛は黄金色に燃えて住ひめり母の御
胸に

◎ (クルス)

己をば利せん心の微塵なき清けき愛はたゞ母の愛

◎ (ヘーベル)

白百合と薔薇手にして春の日に母を枕の夢ぞ戀しき

◎ (ケルネル)

夢
蜜蜂の蜜より甘し母そはにはごくまれたる若き日の

◎ (マルティン)

國民の氣質かたぎの源を探り見れば流れぞ出づる母心より

◎ (ハイゼー)

疲れなば家に歸れよ率さ子供母の眉毛に光溢ふる

◎ (ペテーフイー)

部屋に入るや母は抱きつ我は黙し母に縫りぬ木の果
生るごと

◎ (子ルカソフ)

大偉人の幼な心に母を戀ふは東も西も變らざりけり

◎ (未詳)

最と善しと言ふべきものは一とつのみほかにはあら
じこれ母の愛

◎

(ザウル)

掌合せる母の亡き骸に朝紅照りつ我は伏し泣く

◎

(未詳)

夕紅のなだらかなるに似たるかな傷手を癒やす母の
接吻

◎

(グリュエーンスタイン)

逝きしてふ至福やは今も遺るめる犠牲を怡ぶ母の乳
房に

○

(チール)

秋に似たる淋びし浮世の路をゆくに母は頼みの杖と
しもなる

◎

(マンテガッツア)

母の愛は金剛石か黄金か五色に照れるかの寶石か

◎

(ポアイエツト)

生みの母の徳を何にか比べんや血潮を流す殉教者か
も

◎

(ホイエルバツハ)

ストア振りに諦らむ父の愛よりも諦らめかぬし母の

慈悲心

◎ 子等は家を出で、遠くに趣むけば追ひや往くらん母の祝福

(ヤコブス)

◎

我が母よおゝ我が子よと唱ふなる兩の言葉には神もとさめく

(エーゴ)

◎

静かなる賤が伏家のほの明かき燈火のもと母何を祈る

(ストール)

◎

塵にまみる足をなせるも稚兒を腕に抱くぞ母の樂しみ

(カリダザ)

◎

鵜ウはその胸割きて飢ゑし仔をはこくますとよこれ母心

(ガイベル)

◎

樂園より追はれしエハの涙をば忘らすために神子を賜ひぬ

(ステルテル)

◎

幼子が母と呼ぶなる片言の母の心に如何に聞ゆる

◎

(ベツケルス)

喜びのはた悲しみの獨居に尙ほ偲ばるゝ母の聲かな

◎

(チエーラウ)

暴海に漂ひなせる孤船ひそかたよる港はたゞ母の側

◎

(ポルコー)

詮すべのつきたる子にも詮すべを案じ出すぞ母心なる

◎

(リュツケルト)

花の環を飾る子供等その儘に最とも榮えある母の

の環

◎

(アウエルバツハ)

乞ひもせず奪ひもなさず値ふみせず得らるゝものは

唯だ母の愛

◎

(バイロン)

深く清き泉なるかな母の胸生命の水は其處に湧き出
づ

◎

(未詳)

女親の心に徹ほることがらも男親にはたゞ膝下に

◎

(チエツキツシユ)

打ち給ふ事ありとても母そはの御手は最とく柔し
かりける

◎ (ヘルデル)

母の苦に酬いんとてや天道の賚ひけんかし優し和魂にぎたま

◎ (イスラント詩人)

父に似たる人やは稀にありもせん母に似たらん人ぞ
世になき

◎ (未詳)

乳母はいかに貧しく在はすとも尙は懐に子をし温む

◎ (ストイ)

幾十度春秋迎へ送るとも心にのこる母の面影

◎ (カウリツシユ)

母在さば天を仰ぎて神に謝せもし在さずば墓に俯し
泣け

◎ (印度詩人)

師にも増し父にも増しつ大地にも増して尙ふときあ

く母の徳

◎ (ハイ子)

愛を求め家を出し子の愛を得ず歸りて得たり母の慈
眼まなこに

(トム)

◎ 静かなる夕に空を仰ぎ見れば母を偲べと出でし星かも

◎

(アンデルセン)

地の上を急ぎて流る流星は神に飛びゆく母の祈か

◎

故なる嘆き悲しみ喜びぞ涸れぞ竭させぬ母の詩なる

◎

(シュリックアイゼン)

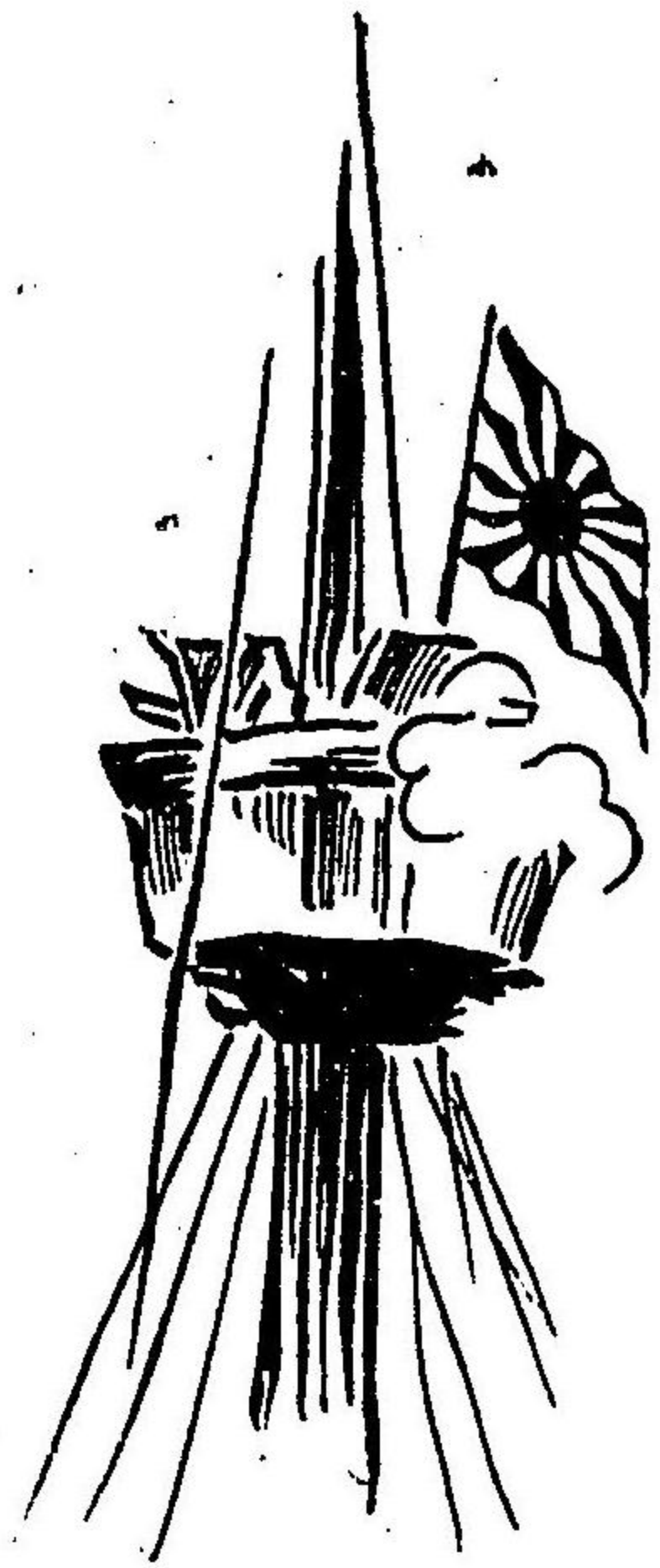
路傍にさまよひ歩りく物乞の婦も如何でマドンナな

らぬ

◎

(インメルマン)

永遠の天に懸かれる母の愛の聖けき星を仰ぎてぞ見よ



明治三十八年十月十二日印刷
明治三十八年十月十五日發行

(接神術)
定價金廿二錢
郵稅四錢

著者 齋木仙醉

東京市本郷區千駄木林町一九六

發行者 日高藤兵衛

京橋區三十間堀二丁目一番地

印刷者 久米川治三郎

京橋區三十間堀二丁目一番地

印刷所 明教社



發行所

東京市本郷區
千駄木林町一九六

日高有倫堂

大 賣 捌

東京京橋區尾張町	東京神田區表神保町	東京神田區裏神保町	東京日本橋區箱屋町	東京神田區裏神保町	東京京橋區南傳馬町	東京神田區表神保町	大阪新齊橋南久太郎町	大阪南本町座摩ノ前	大阪備後町四丁目	京都三條寺町	京都二條寺町	甲府柳町	水戸	野州足利町	廣島市	岡山市岡山町	周防國岩國町	山口大市町	高知市種崎町	熊本市新町二丁目	熊本新坪井町	鹿兒島市松山通リ仲町	後久留米市	
警	東	上	前	林	目	修	福	杉	吉	聖	若	大	川	青	積	奧	白	同	澤	長	好	久	菊	
醒	京	田	屋	川	平	堂	社	助	房	店	造	堂	館	店	堂	堂	堂	店	店	店	堂	堂	店	店
靜岡市	橫濱市	同	同	盛岡市	前橋市曲輪町	越後國水原	新潟古町	越後長岡	金澤市片町	高岡市守山町	福井市佐桂枝中町	信州長野市大門町	信州松本本町	信州諏訪町	仙臺市新傳馬町	仙臺市大町五丁目	陸中一ノ関町	陸奥弘前市土手町	青森市米町	秋田市茶町	同	同	同	同
吉	第	弘	弘	勉	佐	煥	西	西	煥	宇	學	品	西	松	日	紀	藤	藤	今	同	成	富		
見	一	文	集	強	々	乎	村	村	平	都	海	川	澤	善	榮	進	崎	崎	泉	支	見	貴		
書	有	隣	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂	堂

明治三十八年五月 日印刷

新刊發行の都度増補訂正す

有隣堂出版書目

東京市本郷區元富士町二番地

日高有隣堂

主意書

理想と光明とを緯となし、趣味と利用とを經となし、宗教、哲學、倫理に、史傳に、戯曲に、小説に又緊急問題に就きての實際に、苟しくも文明の増進と風教の醇化に大なる功益あるものは其の大家名流たると壯快なる新進文士たるを問はず、其の玉稿を請ふて出版せんとす是れ本堂の主義也。此の故に本堂は全國各位の愛顧を蒙じり御信用を得んが爲めに本堂出版の新刊書籍に對する新聞雜誌の精評を揚げ御觀覽に供し來たり候も漸次増加し其數多くして載せ盡す事不能不得止出版書目而已を掲げ御觀覽に供し御注文を仰ぐことゝしたり。請ふ其の意を諒せられんことを。

網島梁川著

新刊 梁川文集

上製總クロース頁數八百餘頁頗る美本

定價金貳圓

郵税金拾五錢

著者十年病褥に在つて、而も靈筆を絶たず、その文、世既に定評あり、その外形の整然として順序ある、その内容の深遠にして趣味多き、之を讀むもの、決して否定せざる所、本集凡べて七拾餘篇、文藝、美術、宗教、倫理、教育等に關する長短の論文並に美文雜筆を集む、蓋し散文界の鹽なり、泉なり、光明なり、必ず一部當代の渴を癒すに足らん、願くば一本を購つて、座友の友とせられんことを。

文學士 大町桂月著

新刊 家庭と學生

定價金參拾八錢
郵税金 六錢

著者申す、我れに三男一女あり其れを斯くは、しつけせむ、我れも斯くは覺悟せむと心に期するのみにて能く實行せむと斷言し得べき身の上ならねど家庭教育の大切なる、ことを今更のやうに感じて愚者の一得みやとて世の青年の男女の前に呈し合せて世の父兄の前にも呈する者也

依仁親王殿下待講
早稻田大學教授

杉山令吉先生書簡

黑澤辰三郎編

新刊 日名家手簡

定價金參拾錢
郵税金 六錢

世に立つて事をなさんとするもの先づ書翰文に熟達せざるべからず書翰文に熟達せんと欲するもの先づ先輩の往復文を研めざるべからず、是れ本書の出る所以なり本書收むる所我國大家の摸範文に附するに各其小傳を以てし並に書簡文の變遷を明にす、苟くも當の世活舞臺に雄飛せんとするものは男女を欲せず一讀せざるべからず

岩野泡鳴著

新刊

新體詩集

悲戀悲歌

定價金參拾五錢

郵税金四錢

著者の詩既に世に定評あり、その久遠無窮の悲觀、常に高遠幽邃なる冥想を経て、廣く人間界の煩悶を靈化す、蓋しこれ時代の詩界に獨得の地歩を占むるもの、而して「想の詩人」「海の詩人」今やまた「人間界の詩人」と呼ばれんとす、向上か墮落か、乞ふ、この『悲戀悲歌』を見て、之を判じ給はんことを

大町桂月先生序

角金潮聲著

新刊 宇宙と人生

定價金貳拾五錢

郵税金四錢

宇宙人生の問題豈常人の言ひ易き所ならんや茲に哲學者あり宇宙の幽を聞き玄を究めし森羅萬象の生滅變化の本源に遡りて人生の眞諦を内觀直視せんとす。茲に詩人あり天地の美に動き眞に肉薄して以て人生の本義を直觀捕捉せんとす本書は哲學者の想と詩人の情を文に綴りしもの古高の韻艶麗の致、讀者をして三嘆せしむ宇宙と人生とを謳はんとする者は來りて本書を繙け

文學士 大町桂月著

六版

わが筆

定價四拾五錢

郵稅六錢

嘲罵の中に涙あり放言の中に眞理あり教訓あり才氣あり霸氣あり或は洒脱に或は沈痛に或は眞面目に或は詼諧に短くして寸鐵人を刺し長くして萬馬野を走る而かも貫くに一脈の氣と熱とを以てし行るに靈活の才筆を以てす家庭學校社會及び文學等に關する卓見到る處に充ち才情掬すべき美文もその間に光彩を放つ天地間有數の快文字也

文學博士 姉崎先生序
萬朝報記者 茅原華山著

安部磯雄氏の駁論
及著者の駁々論を
附録とす

増補改訂
第四版面新一



●定價十六錢郵稅十錢

▲向上の一路に就かんと欲する者は此書を読め▲此書は個體責任、社會意識、生命一體の三大觀上に社會向上主義を論明したる者なり、▲我國に於て哲學的に社會主義を建設したるは、此書を始めとす▲

安部氏の駁論及著者の駁々論は益々新社會主義の本領を發揮せり▲第三編、第四編、第五編、共に光彩陸續たり▲近時の一大著述にして情理該ね臻る者は此書なり敢て江湖の讀書子に勸む

茅原華山先生編纂

青年と詩吟

(新刊)

定價貳拾五錢

人生豈詩思詩情なかるべけんや『青年と詩吟』は茅原華山先生が岩溪裳川、森槐南、佐々木信綱、平木白星、佐藤紅緑、山縣五十雄、野口米の諸先生に囑して各々其愛誦さる漢詩、和歌、新体詩、俳句を撰び之を『向上の一路』に載せたるものなり今や新に竹越三又、志賀矧川、伊藤銀月等諸家の愛誦詩歌を添へ別冊として發行す日夕此巻を把いて諷誦せば其品性を修養し其志氣を砥礪するの功蓋し計るべからざるものなり

文學士 大町桂月先生 合著
文學士 中内蝶二先生 合著

(五版)

少女と山水

定價參拾五錢
郵税金六錢

人生の美凝つて少女に在り自然の美凝つて山水にあり山水の美や豪宕にして瀟洒少女の美や優婉にして可憐蝶二君の艶麗の文少女の嬌態を描きて筆底に脂粉の氣あり桂月君の洒脱の文山水の幽趣を寫して雲煙紙表に浮動す双々相對して作者各得意の筆致を縦にし高尙優雅家庭の讀物ともすべく文章の根本ともすべし腥風血雨に惱める軍國の讀者諸賢幸に這般清麗の文字に接して宇宙の美を味ひ給ふべき也

高橋五郎著

杜伯品藻

定價卅五錢
郵税六錢

トルストイ伯の主義人物を評す

一言一行一動一靜天下の毀譽賛斥を招致すトルストイ伯も亦豪傑なる哉之を見ること或者は神の如く或者は鬼の如くす著者此世界主義的博愛的絶對愛他的極端非戰的偉人物を四方八面より縦横論評し玲瓏玻璃屋に住する如し其娼妍得失一目瞭然眞理の爲に之を論ず豈唯敵國の偉人として之を評臨する而已ならんや◎讀書子愛讀の榮を賜へ

文學士 大町桂月先生書翰 木村鷹太郎先生書翰
文學士 上田敏先生書翰 前田林外先生書翰

岩野泡鳴著 青木繁先生畫

新體 詩集 夕

潮

定價 參拾五錢
郵稅 六錢

著者の詩冥遠幽邃、深く多大の情熱を藏して、うちに無窮の悲觀を備ふ而してその行文自在の調、激して豪健奇抜の想を構へ、沈んでまた可憐の情を寄す、海に向つて、苟も久遠の感慨あるものは來つて、この冥想的詩人の「ゆふ潮」を一讀せられよ、

文學士 夏目金之助先生校閱
文學士 上田敏先生序文
文學士 フーサー、ロイド先生文
文學士 ナヤール、ラム著 文學士小松武治譯

訂正 五版 註標 沙翁物語集

●上製クロス四百數十頁頗る美本

定價 七十錢

郵稅 十錢

古英雄亞歷山陣中に在りて常にホーマーを誦し那破倫大帝兵馬の間、手、ゲトラを繙かざることなかりしと聞く戰勝國民豈に文界の巨璧シエークスピアを讀むの餘裕なくして可ならんや本書は沙翁戯曲中最も有名なる四大悲劇四大喜劇に加ふるにロメオ、ジュリエット及冬物語等通じて十編の物語を拔萃し精緻なる翻譯を試み懇到なる註解を施し加ふるに數種の附録を以てす。特に文科大学講師先生の校閱を仰ぎたる者にして苟も沙翁戯曲の何たるを窺はんと欲するの士は須らく一本を購ふて座右に備ふべきの書也

海老名彈正先生著

基督教本義

上製 郵六十五錢
並製 郵五十八錢

基督教の本義果して如何之れが明白なる解答を與ふるもの古來宗教史上に光明を放てる豫言者牧師教祖の抱懐せる思想經驗に依らざるはなし本書は基督教界の明星海老名彈正先生卓抜の識勇健の筆を以て上はモイゼより下ルイテル、シユライエルマツヘルに到る迄正確に偉人の悟得を明かにし斯教の本義を説明せられたるもの也幸に愛讀の榮を賜へ

東京外國語學校教授 山口小太郎先生題詩
蘆風 秋元喜久雄譯

訂正 獨逸 紛紅集

美術的製本
定價 卅五錢
郵稅 四錢

ゲトテ、シルレル、ケルチル等獨逸の七大詩人が金玉の佳什を選び、之を流麗精眞なる筆を以て、翻譯したるもの、一句一字の細と雖も、悉く原詩の美を顯はして遺さず。收むる所、清美なるあり、優婉なるあり、風雅なるあり、艶麗なるあり、例へば飛紅紛々として、別原る香氣、人をして酔はしむるが如きもの集つて皆此中に在り、別に原詩を添へ對照に便す。

海老名彈正先生著

再版 宗教々育觀

定價 五拾五錢
郵稅 八錢

宗教界の明星として名聲天下に轟ける海老名先生は本書に於て教育問題に關する所信を告白せられたり其滿天下の耳目を聳動するに足るものあるや必せり見よ先生が該博の識公明の論一讀人を快刀思想界の亂麻を截つる感あらしむるか本書の内容は單に教育問題に限らず廣く宗教の根本義に對する先生最近の思想を發表せられたるもの識者濠々たる我邦思想界に於ける一大探海燈たるや疑を容れず大方の識者請ふ刮目して本書の光焰に接せよ

匿名隱士著

七版

破天人論

定價參拾錢

郵稅四錢

天下を風靡したる天人論に對つて逐條討議的に堂々駁論を試み三一哲
學の宇宙觀と人生觀とを鼓吹したる壯快の書也本書の出づるや全國各
新聞紙雜誌の大好評を博せり出版日向淺きに不拘既に六版を印刷せり
以て本書が如何に愛讀せらるゝやを知るべし

齋木仙醉先生譯

トルストイ教訓小説集

定價金參拾錢

郵稅金四錢

トルストイの宗教論や、大作小説や、洵に是れ雄渾なる革命の聲也、
凄壯なる大煩悶の聲也、思ふに渠が現世界の最大文豪たる所以蓋し茲
にあらん。然れども人は狂瀾怒濤を壯とすると共に、湛然一碧の湖水

